



# ネトラセ妻

～他の男の玩具に成り果てる～

基本CG12枚+α  
本編たっぷり100枚収録!

性格が良くて美人で、旦那一筋。こんな完璧な妻、なかなかいるものではない。  
そうわかってはいるものの――。

妻が「他の男を知らない」という点だけが、俺にとっては不満だった。

だが、そんなある日、妻――真由美にも  
「他の男ともセックスをしてみたい」という願望があることを知った俺は――。

この人ならば抱かれてもいいと思う相手に、  
お互い合意の上で、彼女を『貸し出す』ことにした。

貸し出しから帰ってきた妻が語る彼との行為は、  
あまりにもリアルで、俺に驚くほどの興奮をもたらした。

そして、3回目の貸し出しの際。

俺は真由美に、「彼との浮気行為を  
撮ってきて欲しい」と、ビデオカメラを手渡したのだった……。



「感じてる高坂<sup>こうさか</sup>くんの顔、丸見えだよ」

「あ、ああっ……だ、だめっ……  
見ないでっ……はあっ、あああっ……」

んんん

はあ はあ  
……あのカメラの向こう側に  
靖<sup>やす</sup>くんがいるのだと思うと、  
今まで以上の恥ずかしさに襲われてしまう。

……それに。

新開<sup>しんかい</sup>さん、いつもよりも張り切ってる気がする。

んんん

フッ フッ フッ  
フッ フッ フッ

「あつ、ああつ……ハア、ハア、ハア……  
新開<sup>しんかい</sup>さん、そんな動かないでくださいっ……」



「あ、あ、あ、あ、や、だめっ……  
あ、あっ……くうっ……  
はあんっ……  
くううっ、はんっ！  
はあっ……んんっ……！」

「声、我慢してるんだ？」

「はあっ、はあっ、あっ、うっ……  
べ、別に、そういうわけじゃっ……  
うっっ、ひっ、あうんっ、  
ああっ……！」

はぁ

「そっくだよね。  
撮影しているもんね。  
普段の高坂君の姿は、  
さすがに見せられないか」

「はあっ、あああッ……  
んんっ……！  
そんなこと、言わないで  
くださいっ……！  
あんっ、ふあっ、ああっ、  
だめっ……だめえええっ……！」

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

いくら靖くんが、  
私を感じているところを  
見たいと言っても。

あんなに乱れている所は  
見られたくない。

「そこまで我慢できるなら、  
前にしたときも  
すればよかったのに」

「あっ、ああっ……あっああっ！  
だめ、だめっ……新開さん、  
まだゆっくりっ……！  
んああっ……あっあっ  
あっあっあっあっ……！」

はぁ

はぁ

セックス

セックス

セックス

「もっと顔見せてあげたら？  
夫以外の男とセックスを楽しむ表情を」



「ふあっ！  
やだっ、あっあっあっ  
あっあっあっ……！  
んんっ……んはああっ……！」

「いつもは喜んで  
腰を振ってるのに。  
今日は本当に控えめだね」

「はあ……っ……ああっ……  
い、いやっ、変な事、  
言わないでっ、くださいっ！  
んはあっ、ふあっ、あああ……  
はあっ、ああっ、ああ……！」

フグッ  
フグッ

んんん

はあ

はあ

そんなに自分から  
振ったりしてない。  
新開さんの方なのに、  
激しく振ってるのは。

「ああっ！  
だめっ……だめっ……  
新開さんまって、お願いっ……  
ああ、あ、あ、はああっ……  
まってっ……！んんっ……  
あああんっ……！」

んんん





「あつ、あ、だめええええつ、  
新開さん、それだめ、だめえつ！  
だめなのっ！ ああああつ……  
んっ、あ、あ、ああ……あああ……！」

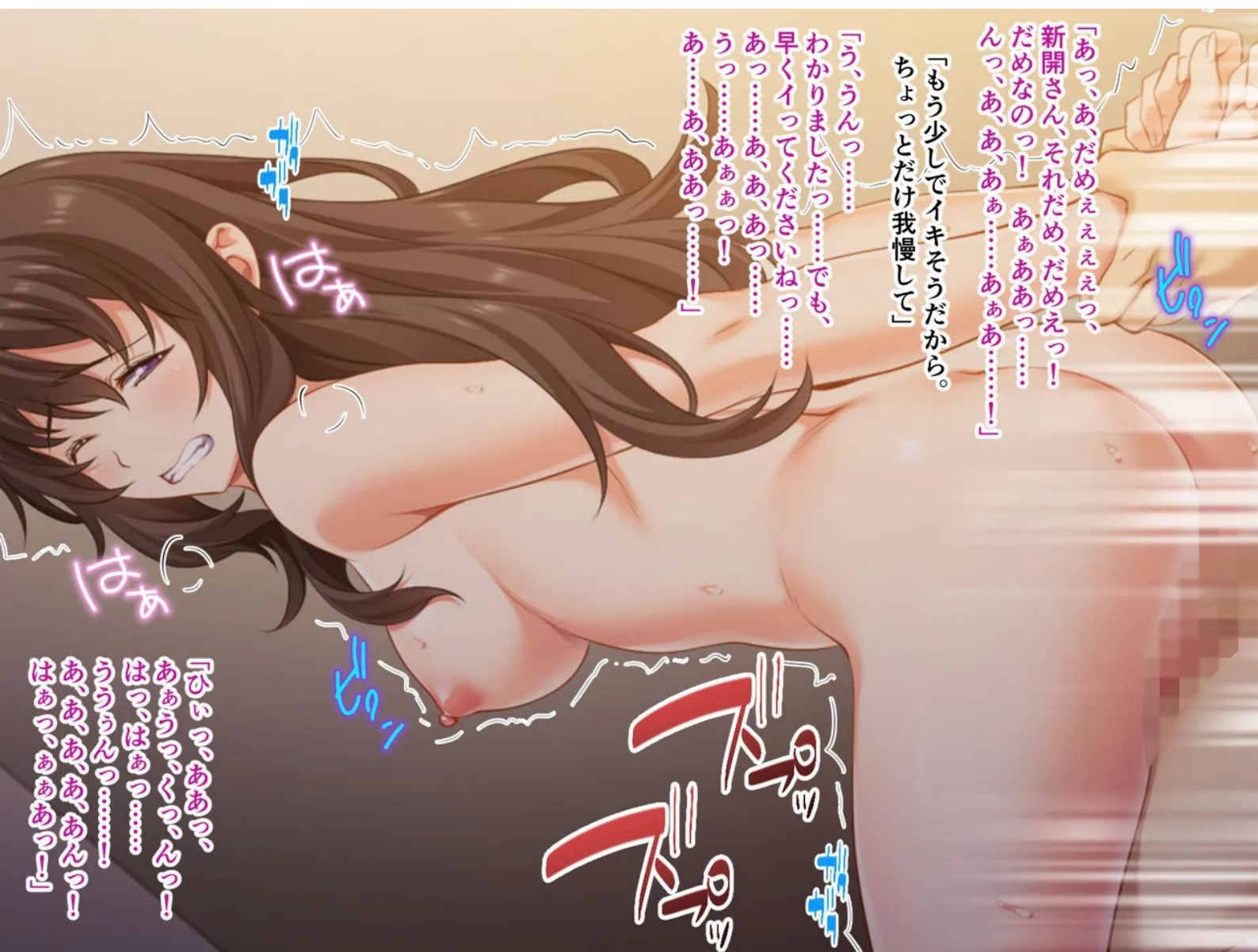
「もう少しでイキそうだから  
ちよつとだけ我慢して」

「う、うんっ……  
わかりましたっ……でも、  
早くイつてくさいねっ……  
あつ……あ、あ、あつ……  
うっ……あああつ！  
あ……あ、ああつ……！」

はぁ  
はぁ

「ひっ、ああっ、  
ああっ、へっ、へっ、  
はっ、はっ……  
うっ、へっ……  
あ、あ、あ、あ、あ、  
はあっ、あああっ……！」

はぁ  
はぁ



「ひっ、ああああっ……！  
あっ、はんっ！んっ……  
ハア、ハア……あくっ、  
あはあああっ、  
ふあっ……あっ、あっ！」

だめ、  
我慢しようと思ったけど、  
やっぱりだめ。

もうイキそう。  
もう我慢できない。

「っっ……！  
高坂くんっ……！」

「あっ……あっ……  
悟さんっ……！  
ああっ、んっ、んっ、  
ああっ、ああっ、あああっ！  
きてっ……！」



「あああああっんんっ……あああああっ……  
ぎてっ……ぎてえっ……！」

「あああつ……あああああああああつ——！」

ゴロゴロ  
チャッ

「あ……あ……ああ……あ……  
はっ……はあっ……はあ……はあ……  
はあ……はあ……はあ……はあ……」

「う……ごめんね……靖くん……」

「ちよつと……はあ……はあ……」

「気持ちよくなりすぎたみたい……はあ……はあ……」

「いつもは、あんなじゃないんだけど……はあ……」

「そうだよな。高坂君、いつもはもっとすごいもんね」

「ちよつと新開さん、どうですかから、えっ？」

…そうして私は、ふらふらとバスルームへ移動した。

気が付くと浴室に新開さんがいた。

新開さんの手が、ゆっくりと下に降りていく。

私のあそこは濡れたままだ。

「するっ」

「じゃあっ……あ、あと、一回、だけですよっ……っ？」

「OK……じゃあ、また撮らないとね」

撮らなくても……と思ったけど。

今日は靖くんが撮ってきいて言われてるから……やっぱり撮らなると浮気になっちゃうのかな。



「んんんんんっ……！  
んんんん——っっっ」

そんな私の中に、  
待望のお×××が  
入り込んできた。

「や、やだっ、  
こんなくっついた格好っ……  
あ……はあっ、こんな……  
あっ、ああっ……！」

「旦那さんに  
見られるのは嫌？」

「い、嫌に、  
決まってるじゃないですか、  
そんなっ……っあああっ……  
あああっ……はああっ……  
あ……ああっ……んあっ！」

「でも、案外喜んでいるかもよ？」



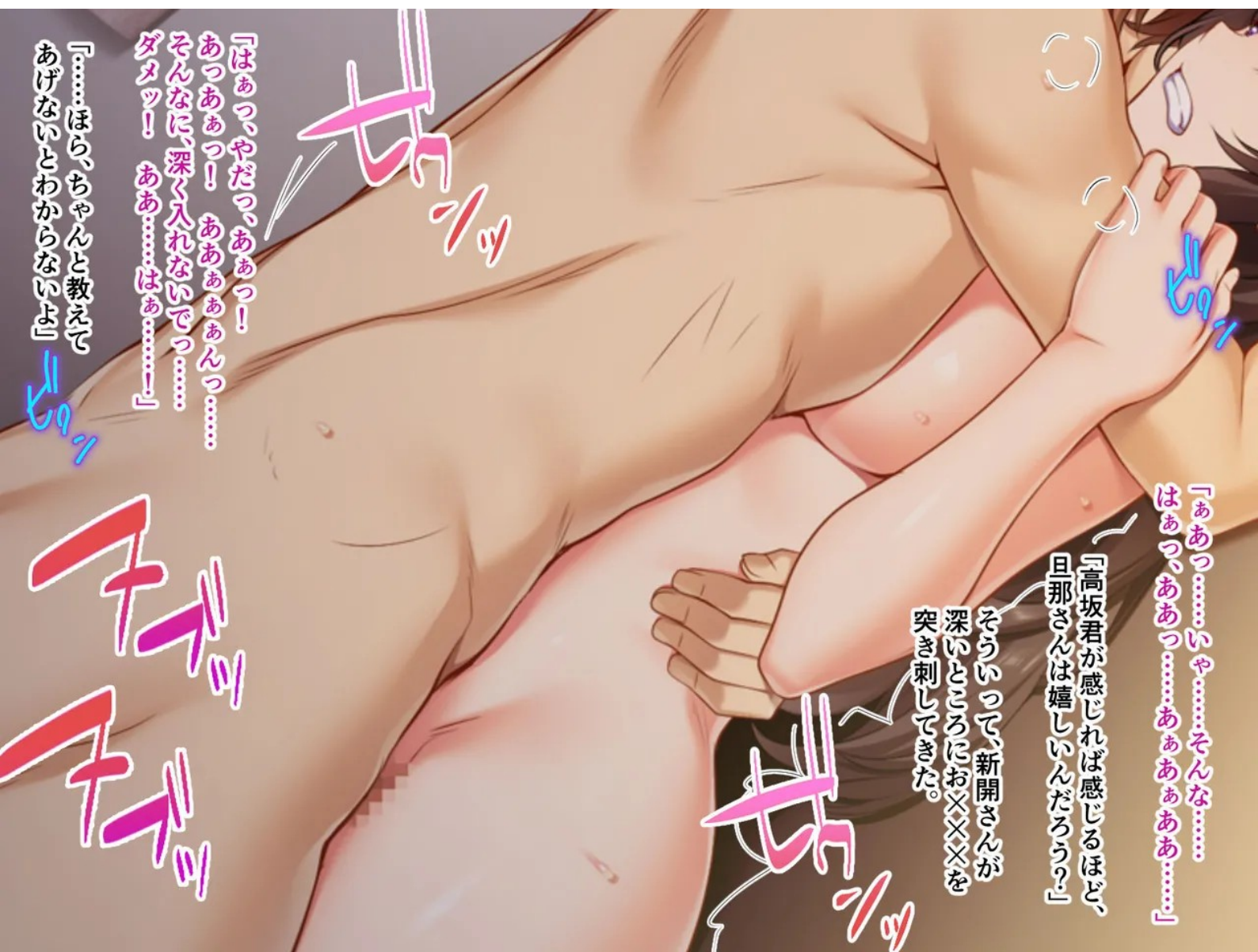
「ああっ……いや……そんな……  
はあっ、ああっ……あああああ……」

「高坂君が感じれば感じるほど、  
旦那さんは嬉しいんだろうっ」

「そういって、新開さんが  
深いところにお×××を  
突き刺してきた。」

「はあっ、やだっ、ああっ！  
あっああっ！ あああああんっ……  
そんなに、深く入れないでっ……  
ダメッ！ ああ……はあ……」

「……ほら、ちゃんと教えて  
あげないとわからないよ」



あ、あ、ふあ……  
ご、ごめんっ……い、今っ、すごく、  
深く……入れられてるのっ……はあっ、  
はあっ、おかしくなりそっ……ああっ！  
あ、ああっ……あああっ……はああっ！

「い、イク、いくうっ……！  
イツチャウ！ んんっ……  
んんんんんんんんんんっっ！」

は……♡  
「あっあっああっ……ふあっ……  
あああんっ……あああ……  
だめ……だめだよ……あ、あっ……」

んんんんんんんんんん……♡  
は……♡

んんんんんんんんんん……♡

「ほら、ちゃんと見せて。  
イッたあとのトロンとした顔」

カメラを見つめた。

靖くん、どんな顔で

私を見ているんだろう。

「……こんな顔するの？

普段は」

「はあ……」

は……っ……

しない……しないでっ……

は……っ……はあ……」

興奮、してくれて  
いるのかな。

こんな、いやらしい  
私を見て……





「そんなに気持ちいいんだ、俺とするのが」

「そんなことまでは言って……あああつ……ないっ……！  
ああつ、んっ、んんっ、あああッ……んんっ……！」

「じゃあ、どうしてそんなにエッチな声だしてるの？」

「はんっ、ああっ、んっ、あああつ……！  
新開さんっ……  
意地悪しなごっ……  
あつ、ああっ……っ……  
お、お願いっ……！」

「そのおの……  
あ、あつ……おの……  
と……が……の……  
あ、はあ、はあ……っ……  
んん……あ、あ、んんっ、  
ああ……ハアア……  
ああっ、はあっ……！」





「あっあっあんっ……あ、  
あああ、ああ、あ、あああ、  
も、もうっ……限界っ……  
新開さんっ……新開さん……  
お願いっ……！」

もっともっと、もっと……  
「晩だっしてしてほしい……！」

「一緒にイこう、高坂君」

チビッ  
チビッ  
チビッ

セクッ  
セクッ  
セクッ

「はっ……ハァっ……くっ……  
ぐっ、ダメっ、おかしくなる、  
おかしくなるっ……あ、あ、  
あ、あ……あっ……！」

「来るっ……あ、あ、あ……  
ぎちゃっ……妻のっ……  
ぎ、ぎちゃっ……  
あ、あ、んっ、んっ、んはあっ！」

チビッ  
チビッ  
チビッ  
チビッ

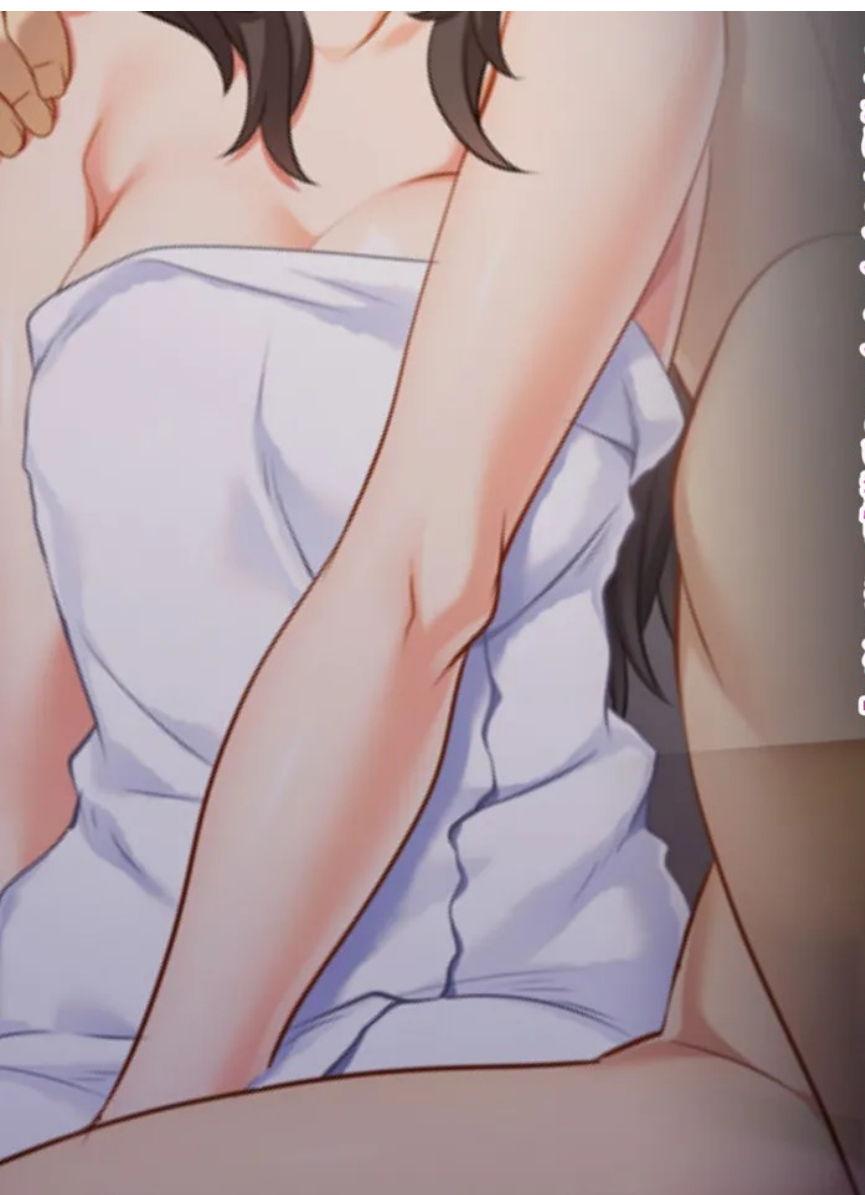


「……録画、止めました？」

「ああ、止めたよ」

「お疲れさん。やっぱり、普段と違ったよ」

「それはそうですね。すっごく我慢しましたし」





「え……あれ、我慢してたの？」

「我慢してたんですよ、私なりに」


「俺とするのは、だいぶ慣れた？」

むじゅ...

「……それは今日で3回目ですし、それなりに慣れますよね」

「3回も続けることは思わなかったな、最初は」

「私もです。最初の2回で終わりかと思ってきましたから……」



「本当に好きなんだね、  
君の旦那さんは」

「大事にされてるのか？  
少し心配になるよ」

ムス

「よくわからないですけど……  
一応大事にされてる  
みたいです。これでも」

「ならいいんだけどな」

「まゆちゃん、  
ちゅるちゅるちゅ」

ちゅっ

「え、なに……んむっ……!？」

「むっ、チュっ……むっ……  
ンブッ……ジュブッ……  
フパッ……はあっ……  
あっ……んちゅっ……」

キャブッ

「んはっ……うえっ……  
これなんですか……」

「ウイスキー。」

「まゆちゃんも飲むかなって」

「飲まないですよもう……  
こんな強いお酒……」



「まあまあ。  
はい、おかわり」

……と、ウイスキーをまた  
回にふくむ新開さん。

「えー……やですつて。  
私おさげ弱いんですから……」

「んー……ん!!」

七つゆっ

「もー……んっ……」

仕方なく私は、新開さんにキスをした。



ちゅっ

ちゅっ  
ちゅっ

ちゅっ

「んっ、チュ、むんっつ……  
れろっ……ペロッ……  
んっ、んん、ううっ……」

……そして、お口の中の  
ウイスキーを  
舌を絡めて味わった。

「んっ、んっ……んっ……  
んむっ……んっ……  
ふっ……んっ……」

「んはっ……は……  
は……  
お酒とタバコの臭い……」

「旦那とは全然違うでしょ」

Pa.1

Pa.1

「あつ……ちよつと、  
なにするんですか！」

「まゆちゃんと一緒だと、  
こうなっちゃうんだよな、俺」

そして、  
自分の股間を指さした。

はあ

「……最悪」

……やる気まんまんだったんだ。

『はあ、はあ』

んんん

「むっ……んっ、チュツ……  
ふはっ……あああっ……  
んんっ……んはあっ……」

「……んはっ……」

ほんとに  
だめですって……」

嘘。

期待してる。

はっはっ

はっ

はっ

3回目。  
無理やりされちゃうセックスを。

「ちょっとだけだから」

「あ……ん……」

あ……ん……」

「んっ……あ、あ、  
あああ、あ、あっ……  
あああああああああ……」

「入ったぞっ……  
すごい締め付け」

「や、やだっ……そんな事  
いわないでっ……」

セックス  
……

「もう撮ってないよ、高坂君」

そうだった。

もう、我慢する必要はないんだ。



「んっ、んんっ、あうっ……  
つくっ……あっ……あぁっ  
ハァ、はぁっ……」

……そう思うと、  
すごく気が楽になった。

気持ちよくなるとも  
らぶっと言わなくても  
みたかったな。

はぁ

はぁ

んんん

んんん

「……ねえ、真由美って  
呼んでもいい？」

「はうんっ！

んっ、ふぁっ……あぁあっ……

あぁっ、ダメ、ダメですよっ、

そんなっ……んっ、んんっ、

あぁあッ……んんっ……」

「動くよ、真由美」

んんん

んんん

呼び捨てにされると、まるで新開さんが恋人のように思えた。

本当は全然違うのに。私の上司でしかないので。

「凄く、あっ、激しい、ああんっ！  
ああっ……  
ああああああ……  
あっあひっらっー！」

「本当は沢山  
声出したかったんですけど、  
めっきは」

「は、はいっ、が、我慢するの、  
大変でしたっ……ああっ……  
はあああっ……ああっ……うっー！」

「そうだね。  
まあ……ほとんど我慢出来て  
なかった気もするけど」





セックス

「あああつ……！  
ああつ、イ、イクウツ……  
イクツ……だめつ……  
だめえええええつつつ……」

「んはあつ……はあつ、  
はあつ……ああ……  
ああああつ……」

「はあつ……  
すっごい締め付け。  
本当、馴染んだよね」

「だって……はあつ……  
はあつ……出張に来るたびに、  
新開さんのお×××、ずっと  
入りっぱなしじゃないですかっ……」

新開さんとセックスすると、  
3時間とか4時間があつという間に  
過ぎていってしまう。

セックス

セックス

あーっ

あーっ

「あっ、あぁっ、ひらっ、あ、あ、あ、あ、んっ……すきっ……悟さん、悟さんっ……! あっ……うあっ…… あぁっ……!」

「SSSS! もう撮ってないから。いっぱい呼んで、俺の名前」

あーっ

「あ……あぁ……っ……悟さん、ひっ、やぁあっ……あんっ……あっ、あぁあぁあぁっ! あぁあっ、うんっ……はぁあっ……はぁっ……んんっ……!」

「あ、あ、あ、だめ、だめっ、こんなのっ、気持ちいいよっ、あっ、き、気持ちいいっ、いらっ、いいよおおおおおお」

「俺とセックスするの好き?」

あーっ

あーっ

あーっ



「あっ……あああっ……  
だめ、だめっ、だめえっ……  
あああああっ、イキそう、ああっ、  
ハァン……もうだめっ……!!」

「っっ……!!」  
真由美、出すぞっ……!!」

「あっあっあっあっあっ……  
イクウウウウウウウウウ!  
イクウウウウウウウウ……!!」

ゴトゴトゴト  
ゴトゴト  
ゴトゴト

「あっっっ……はあっ……  
ア、ア、ア……あ、  
らや……らやあ……」

「はあ……はあっ……  
はあっ! はあっ……はあ……  
はあ……はあ……はあ……」

アッ  
アッ  
アッ

「……また出張が決まったんだ……」

「あぁ。いつものやつ」

「そうなんだけど……本社に行くのとは別に、もう一つ決まりそうなの……海外出張でフランスに行くやつ……」

「結婚してるので他の人にとって言ったんだけど、聞き入れてくれない可能性高いつて新開さんに言われちゃって……」

「さすがに嫌だよな……新開さんと一緒に、一か月もフランスに行くのは……」

「そこまで行くときさすがにな……」

「……実はね、そろそろ会社やめようかな……とも思ってたんだ」

「……もう少し、時間かけて考えてみるね」

「……そうだな。それがいいと思う」



「……あつ、海外出張の話も大事なんだけど……  
今度の出張行ったらしばらく無くなりそうなんだ」

「ああ、いつもの大阪本社に出張するやつ？  
今度の行ったら、しばらくもうないのか？」

「私が会社に在籍している間はもうないかなあ……  
だから多分最後になるとおもう」

「……どうする？ 靖くん？」

「……私が貸し出される機会も、きっと最後になると思うから……  
だから、靖くんが決めてくれてもらおうよ」

「じゃあ、最後にひとひらかな」

「……する？」

「ああ。そして……それを間近で見たら」

……新開さんの部屋は、  
真由美の部屋とは違ってタバコの臭いが充満していた。

「……じゃあ、奥さん、お借りしますよ。」

「は、はら……。」

……しかし、プレイはなかなか始まらなかった。

何とか新開さんが雰囲気を作ろうとするのだが……

真由美の視線が、忙しく俺と新開さんの間を行き来していた。

「あのね……靖くん、ごめん。

最初だけ……隣の部屋にいてくれる？」

「……おねえさん、セックスが始まる前から……戻らなくていいよ。」

「うん……いいよね。」



俺がひなくなれば進展するのさ。

「そうだよな。進展するよな……」

きつと俺とは話してらなからならな……  
新開さんとはしてらるのだから。

生のXXXXでセックスをしてらることだって、十分に考えられる。

中に出されたりも……それも、真由美が望む形で。

『あぁ……真由美……』

……そうして、俺は20分待った。

もう、始めてらてもおかしくない時間。

真由美が新開さんのセックスに没頭しているであろう時間。

その時間を待って……元居た部屋に戻った。







「だ、だめっ……ああうっ……  
んっ……ああっ、ああうっ、  
ああっんっ……ああっ……  
やつ……っ……ああ……  
あっ、あっ、あっ！」

「んああっ、はあっ、  
うっ……ん……ん……  
うっ……ん……ん……  
うっ……ん……ん……」

「あああ……  
あああ……あ、  
あっ……はああ……」

動画で見た時以上だった。

目の前で、  
妻が浮気しているのだ。

「すごいエッチな顔して  
イクんだね……真由美は」

は……ん……ん……  
は……ん……ん……  
は……ん……ん……

「旦那さんだ  
見られながらされると  
感じちゃうんだね」

「あ……………ああ……………  
あつ、あつ、あつ……………  
んっ、ち、ちがいますっ！  
あ……………あ……………あ……………  
んああつあああつ！」

「本当はもっと乱暴に  
してほしいんだろ？」

はぁ  
はぁ  
はぁ

フブッ

フブッ

「あつ、いやっ、そんな事  
思ってませんっ……………！  
あああつ、ああ……………ああ……………  
あふあはっあああああつ……………！」

「本当に？ じゃあ、どうして  
そんなに感じるの？」

「あああんっ！ ああつ……………！  
だ、だってっ……………だつて、だつてっ……………  
新開さんのがっ……………か、固くてっ……………  
すぐく硬くて、奥まで届くからっ……………！」



「ちよつと声大きいね。抑えないと」

「んむっ……ジュップパツ！  
むっううっ……んんうっ！  
ん、むっ……  
クチュツ……ブチュツ……」

七っやっ

七っやっ

七っやっ

「俺とする時とは大違いじゃないか……そんなに気持ちいいのか、新開さんのセックスは」

「ああっ……！  
き、聞かないで、そんなっ……！  
あんっ……はあっ、あああんっ……！  
あんっ……くううっ、ああっ！」

「……いつも、そんなに濃密なキスをしているのか」

ブッブッ  
ブッブッ



「ち、違うのっ……あああつ！  
いつもはっ……こんなキスじゃないのっ……  
んんむう、んっ、んっ、ふうらうらうっ……  
っ……ブチュッ……ブブツッ！」

「んっ、あんっ……あああつ……  
ああんんっ……っ……ああ  
……あああつ……だめっ。  
またくるっ……新聞さん、  
ダメっ……んくっ、あああつ  
あはっ……はっ……！」

「いいよ、俺も  
イクから……っ……！」



「あああつ！  
あつ、ああつ、はああつ、  
あああつ……！ だめっ……  
だめええええええええ——っっ！！」

……そうして。

二人の絶頂が重なった。

「では、私は食事がてら少し休みますので、1時間ほど失礼しますね」

「……奥さん、抱いてあげてください」

……新開さんが去って、ようやく金縛りが解ける。

「真由美」

「やす……くん……」



俺は、他の男に犯●れ、  
崩れ落ちた格好のままである  
真由美に近づくと……



「あっ、あああっ……んんんっ……  
だめっ……あ、  
あああああああああああっ……!!!」

無理やり×××をねじ込んだ。

ずんずん

「あんなにっ……あんなに  
淫らに感じやがってっ……!!」

はぁ  
「んあっ、あんっ、はんっ、だ、だめっ、  
だめだよっ、こんな乱暴なのっ……!!  
ああああっ……ハア……あああっ……  
ああっ、んっ、んんっ、  
あ、ああ、ああ、あ、あああ」

「そんなに気持ちよかったのか!  
あんなにイキまくって……!!」

「ああっ、あつ、だつてっ、だつてっ……  
我慢できなかったんだもんっ……!  
あつあつ、はああつ、あああつ……  
あ、あ、あ、あ、あつ……」

「キスだつてあんなに  
嬉しそらにっ……」

「そ、そういうつもりじゃ  
なかったつ……  
キスしてなんて、  
わたしいつてないっ……!  
あああつ、いやああつ……  
ああつ、ああん、やつああつ」

「新開さんにごうやつで  
激しくされたのが  
そんなに嬉しかったのか!？」

「う、うんっ……!  
ごめんなさいっ、新開さんに  
激しくされたら、私  
だめになっちゃうのっ、  
ああんっ……あつ……  
だめっ……ああつ、ああうっ、  
あ、あ、あああつ……!」

あつあつ

あつあつ

はあ

はあ

あつあつ

あつあつ





生で挿入したまま……  
射●してしまった。

でも、構うものか。  
妊娠するならすればいい。

「うそっ……なかんでるっ……  
ゴムつけてないの、靖くんっ……!？」

「ああっ……くっ……!？」

「は……っ……」

「は……っ……」

「あああ、ああっ……」

「あああ……はあっ……」

「えっ……っ……」

……出してしまった。

ドムムムム

セキッ

セキッ

びゅん

びゅん

「俺が見ているのに、俺以外の男であんなに感じるなんて……！」

「はあっ、あああっ……ああ……ああっ、

ち、ちがうっ……わ、私のせらじゃっ……はあっ……はあっ……はあっ……はあっ……!!」

「求めていただろ、真由美からも……！」

「私っ、我慢したもんっ、すぐぐ我慢したっ、あっ、んんっ、はあっ、ああっ、はああっ、あああっ……んっ、ああああんっ……！」

「そんなわざとらしい声を出すなよっ……俺としてみるときは、どうせ演技なんだろ……!?!」

「あっんっ、靖くんだって、気持ちいいもんっ、う、うそじゃないよっ……本当にっ……!」



「どっちがいいんだ。  
真由美はどっちのセックスが好きなんだ!？」

「あ、ああっ!  
っっ——っ……  
新開っ……さんっ……  
あ、あああっ!」

「新開さんのセックスの方が、  
っ……気持ちよかったですっ……!  
ごめんなさいっ、ごめんなさいっ……!」

ド  
ム  
ム

「っっ……!!」

「あ、あ、くっ……っ……!  
あ、ああ……あ……あっ……  
またっ……でてるっ……!」

「っ……まだだ。  
まだ……終われないっ……!」

セックス

セックス





「はっ、んああつあああつ！  
んっ……あつ……っ……あうんっ、  
あ、あああ、ああ、あ、あああつ！」

でも……あんなものを見せられたあとで、生でやっているのだ。

我慢なんて、何の意味なかった。

「ああつ、ああん、やつああつ、  
ああつ、んっ、はあああつ！  
あつ……うっ……あああつ……  
ああつ、あつ、あつ、ああああつっ！」

「……」

「はっ！ ……はっ……  
はあつ……！ はあつ……  
はあつ……はあつ……」

「ひびきよ〜……一度もイかせられなかった……」

「……ううん。ちゃんと最後イけたよ。……最後すぐ気持ちよかった」

「嘘……じゃなひよなの？」

「そんなウソつくわけないでしょ？  
ちゃんと気持ちよかったよ、靖くん」

「そっか……よかった……。……ごめん。  
本当にごめん。中に出しちゃって……」

「ちょっとびっくりしたけど、いいよ。  
だって、子供……そろそろつくらないといけないしね」

「……こんな風にするのは、もう絶対やめる。  
本当にすまなかった」



「いらつてば、本当に。」

「でも……次はちゃんと相談してからしようねっ」

「ありがとう、真由美……」

結局、退職前に最後の仕事を収めたいということ、真由美はフランスへ出張に行くことになった。

「……じゃあ、行ってくるね」

「ああ。気を付けて」

「……愛してる、靖くん」

「愛してる、真由美」

貸し出しは前回で終わりだから、  
そこだけしっかりしてほしいという俺の願いを、  
真由美は笑顔で受け入れてくれた。

だから……出来る限り、真由美の事を信頼し続けよう。

一月後……彼女を笑顔で迎え入れるために。

愛する妻に再会できる日を、俺は心待ちにするのだった。









ちゅん

「もう……わかった。  
うっかならでねっ」

「ももっ、  
靖へん……っ」

「あんなの、  
急ぎなさいっ」

はぁ

はぁ

「さ、  
あんなさあ」

「まもか浮気、  
してるとさあ」

「浮気？ まもかー。  
してるわけならさあ」

はぁ

はぁ

「あーんごー」

「ほんとだよ。  
新開さんだってわかってるし。  
そんなのするわけないじゃん」

「ま、そりなよな。  
なかなか出てくれないから、  
ちよつと心配になったよ」

ちゅっ

グッ

グッ

「私がエッチしてると思った？」

「……ちよひごだわ」

「してもらなら、するなよー」

「ダメだって。」

「さすがに今回は」

xxxxxx  
xxxxxx

xxxxxx  
xxxxxx

「愛してるよ、真田美」

「うん……」

「愛してる、靖くん」

「……悟……ん……」

ピン

フグ

フグ

七ちゃん  
七ちゃん

はあ

はあ

長期の海外出張。  
言葉の通じない国。

思えばそうだったストレスの  
はけ回だったのかもしれない。

「むっ、んっー」  
うっ……んっ、ススッ……  
んっ……むっ……んっ、ススッ……  
んっ……んっ、んっ……んっ、んっ……」



「ああん、やあだ。  
ちゃんと気持ちよくして」

「ええ……  
疲れるよ、動くの」

「やーだ。  
気持ちよく  
してくれない人とは  
えっちしない」

はぁ

はぁ

んっ

んっ

「そらなの？  
真由美とやりたのだから  
気持ちよくするわ」

「うん……わたしもぎゅって  
締め付けてあげるね」

んっ

んっ





出張から帰ってきた真由美が、退職することを会社に伝えて一カ月。

「送別会？」

「うん。私の送別会してくれるんだって。でもね……私お酒飲めないからなあ……」

「新開さんに相談してみようか。来るんだよね？」

「それいいかも！ じゃ、新開さんに守ってもらおうようにするね」

「そうした方がいいな」

「帰りは遅くなるけど、11時前には帰ってくると思うから」

「ああ、わかった。楽しんでおらな」



「真由美君、真由美君？」

「ふえ……はれ……の……んは……」

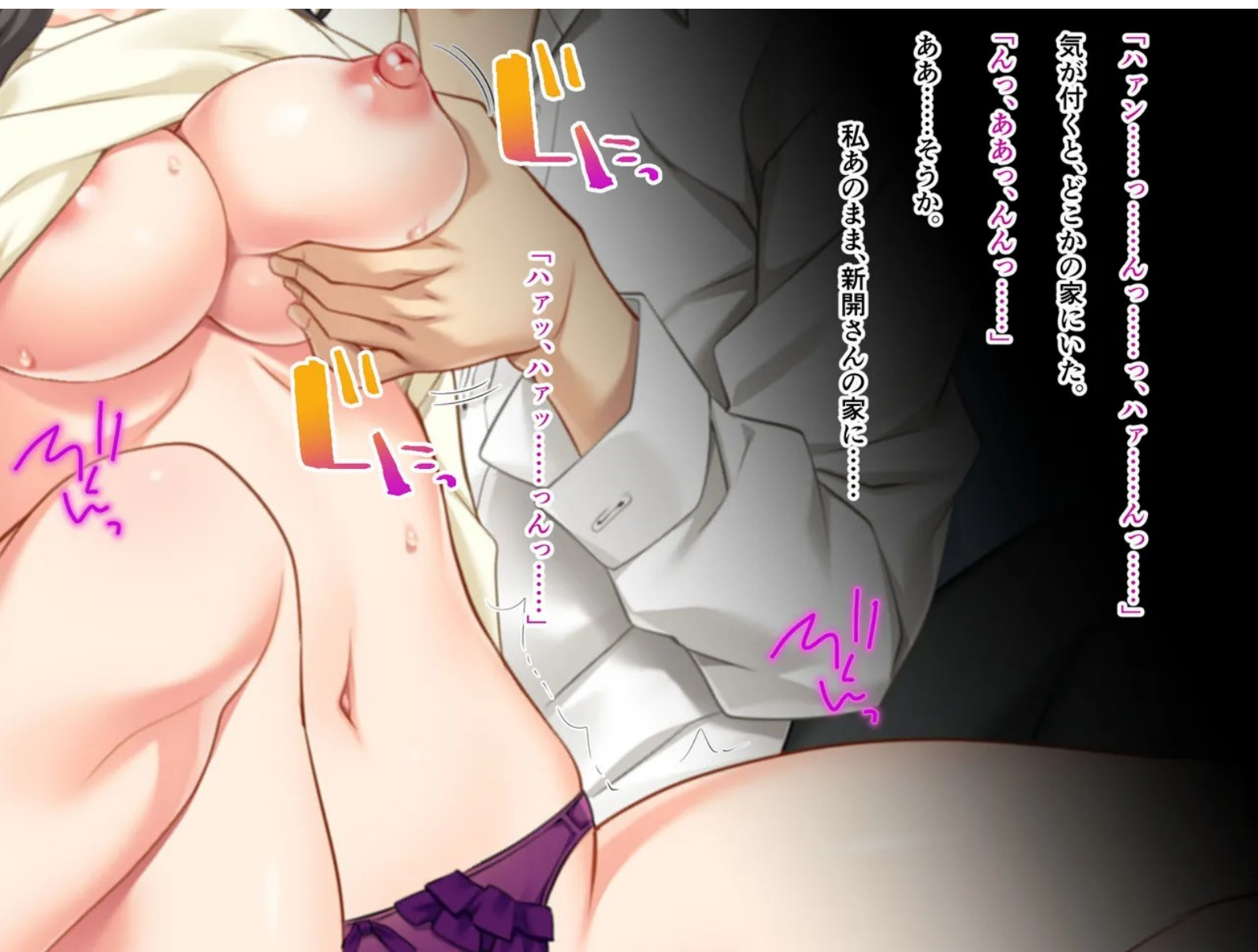
「居酒屋だよ。もうラストオーダー終わって、会計済ませちゃったよ」  
「とりあえず、もう出なるとはげなげから、帰ろう」

「はあい……」

自力で歩くことが出来ない私は、  
新開さんにしがみつこうような恰好で夜の街を歩いた。

「むっ、むっ……はあ……  
ちゅっ……むっ……ふっ、ふっ……  
はっ、むちゅっ……んっ……」

……新開さんと、キスをしながら。



「キーン……キーン……キーン……キーン……」

気が付くと、自分の家だった。

「んっ、ああっ、んんっ……」

ああ……そうか。

私あのまま、新開さんの家に……

「ハアッ、ハアッ……っんっ……」

んんっ

んんっ

んんっ

んんっ



「んっ……はぁっ……  
あっ……んっ……  
ふうっ……んっ……」

……新開さん、  
私のカラダ、触ってる。  
すごく気持ちいい……

「んっ……あああ……  
ああっ……あっあっああっ、  
ああ……ふああっ……」

……でも、これじゃ  
浮気になっちゃう。



「あ、あつ……あ、あつ……あつ……あつ……」

靖くん、家で私が帰ってくるのを待っているのに。

「あつ……だ、だめっ……し、新開さん……？」

あ、あつ……んっ……あ、あつ……」

ま……ま……♡

ま……ま……♡

……新開さんは何も言わずに、静かに私のカラダを触っていた。

「ああつ……いや……ああつ！  
ああああんっ……はあつ、はっだ、めっ……新開さんっ……やめてっ……あっ、んっ……」

キゅん、キゅん

びゅん

びゅん

びゅん



「だ、だめ……ほんとに……  
ダメえ……」

「もうとすらいふこと  
してあげてよ、俺たち」

「はあ、はあ……あつ……  
あふああつ……で、でも……  
あつ、あああつ、こんなの……  
しちゃいけないこと……  
だから……」

「ああつ……あああつ……  
んつ、んつ、う、浮気はつ、  
ダメだから……あああつ、  
あつやつ……くつ、ああつ、  
いつ、やつ……んちゅつ……」

「大丈夫、×××入れなきや  
ただのスキンシップだよ」

びゅん  
びゅん

びゅん  
びゅん

はあ

はあ

はあ

はあ

びゅん

びゅん



「旦那さんには俺から連絡したよ。  
奥さん酔いつぶれたようなので、  
うちの社員と一緒にうちにいます、って」

「あ、あつ……うそっ……  
誰かいるんですかっ……？」

「まあいいけどね。  
だから、心配しなくてもいいよ」

「あああつ、あああつ！  
はうんっ！ あ、ああつ……  
はあ、はあ……っ！ んん……  
だ、だめっ……あ、ああつ……！」

「そんな声でダメって言うても、  
説得力ないよね」



「あつ、あつ……あつ……  
あ、あ、あつ、んっ、んっ、んっ！  
新開さんが、  
え、えっちなところっ……  
さわるからっ……！」

「やめて欲しいの？」

「イキそうなのにダメなんだ？  
いつもはもっとしてっつて言うのに」

「イ、イキそ……  
だから……だめっ……！」

「イ、イったらっ……  
入れなくても浮気につ……  
なっっちゃうっ……んっ……！」



「そっか。  
じゃあイかなければ  
触ってもいいんだね」

「う、うんっ……  
だから……あつ、  
あぁうっ……んっ……  
やっ……っ……いっ、  
あぁっ、あぁあぁっ！」

はぁ

はぁ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

「欲しくなってきた？  
これ」

「すごく硬い……」

「あつ、あ……こんなっ……  
あんっ！ あつ、あぁつ！  
あつ！ ひっ、はぁあつ！  
ず、ずるいっ……」



「あ、あ、あ、あ、くふうっ……  
はあっ、あ、あ、あ、あ、あっ、  
いっ、いっ、いっ、いっ……  
あ、だめっ……ああっ……  
だめえ……っ……」

「……入れても、  
動かなかったらセックスには  
ならないと思うよ」

「はぁ……はぁ……  
はぁ……はぁ……  
っ……はぁ……」

「どうする??  
入れるだけなら入れる?」

「入れる……だけなら……」



「ああっ……ああああ……  
うちうちうちうち——っっ……!!!  
はあっ！ はあっ……っ」

……入れられただけで、  
小さくイってしまった。

セ  
ッ

セ  
ッ

は  
ま

は  
ま

キ  
キ

キ  
キ

「ああっ……だめ、  
あ、あっ……だめ、  
あっ……だめえっ……」

「大丈夫？ 俺動いてないけど」

「は——っ……はあっ……  
あ……あああ……あああああ……」

どうしよう。

入れただけなのに、  
すごく気持ちいい……

「つつっっ——っ!!  
はあっ!! はあっ!!」

「……2回もイッたのか。  
入れただけなのに」

セッ  
ッ

はっ  
はっ

はっ  
はっ

はっ  
はっ

「は——……  
はああっ……  
ち、違います……  
あ、あっ……」

「違うの?  
俺にはイッたように  
見えただけ」



「じゅっ……ふっ、ふうんっ、  
ん、むっ……ぶっ、ぶっ……  
ふむっ、んっ、んっ……」

「んっ……んんっ……  
はっんっ……んっんっんっ……  
ハア……んっ……ハア……  
ああああ……あああああーっ……」

Haruo Haruo

んっ

はっ……♡

「あああっ……  
だめ……もう……  
だめっ……あああっ……」

「……動いちゃおうか、もう」

「はっ、はっ、んっ、  
ああ……うそっ、だめ、  
だめえ……あああっ……」

はっ……♡

んっ

「きりきりして最後だし、  
ささっささっ」

「んっ、はっ、だめっ……  
あっ、ああっ……  
あ、あ、ああ……ハママ……  
ああっ、あああっ……」

はぁ

はぁ

「もう、旦那さんじゃ  
満足出来ないカラダに  
なってるんじゃない？」

「ああっ……なっ……なっ……  
なっ……ないもんっ……あああっ……  
ああっ、そんなんっ……  
ああっ……あっ、ああっ……」

はっ  
はっ  
はっ



「だ、だめっ……  
ああうっ……んっ……  
ああっ、ああうっ、  
ああっんっ……ああっ……  
やっ……っ……ああ……  
あっ、あっ、あっ！」

「SSの？  
今やらなかつたら、  
多分俺とはもう  
することなげよっ！」

はぁ

はぁ

「だったら、  
最後のチャンスなんだから  
するべきでしょ、セックス」

「うっんっ!!  
ふっ、んんっ……ふあああっ、  
あっ、あ、あ、あ、あっ……  
ああっ……!! んむうっ……!  
チュッ……んっ……ぢゅっ……」





「はあああつ、  
あーあーあーつ……  
イ、イっちゃう……ああつ……  
イっちゃうよつ……」

「ん、んむり……  
むっ……うっ……んっ……  
はあ……んっ……  
んふうんっ……  
うっ……んっ……」

セ  
ッ

はあ

はあ

セ  
ッ

「……じゃ、そろそろ  
一発目、いくよ」

「あつ、あ、あ、あ、あ、あんつ、  
はあつ、あつ、ああつ、んっ……  
ハア、ああつ、いやいやつ  
ああん……うああつ……」

ド  
キ  
マ  
キ



「...大丈夫。抜かずに2回目もしてあげるから」

「あつ.....あふああつ.....  
はあつ.....んんつ.....はあ、  
はあ.....ああ.....はあ.....  
ヤア、ヤアアッああああつ.....」

もしかして、  
生でしてるんじゃない.....  
そういえば新開さん、  
ゴムつけてたっけ.....

「あああんつ！  
ああつ.....あうつ.....ああつ！  
あうううつ.....ああ.....  
あつ、あつ、あ！」

アッアッアッ

どうしよう、新開さん、  
どこでイクつもりなんだろ。

お腹？ 胸……？  
口の中……？

それとも、私の中……？

「あああつ、あああつ、  
ああんっ、イイツ、イイツ！  
あああつ……！  
イク、らっらっ……！」

セックス

ドクドク

チュッ

「……っ……  
あああ……田ん……」  
「あああつ！  
イック……  
イっちやううううう……  
だめえっ……イクっ！ イクっ！  
……イクっ！！」

セックス

（あ）





「ああ……………」  
あ…………あ…………  
あ、あ…………あつ……」

中で新開さんのお×××がどどどしつた。

ああ……やっほり……

あつ

す……す……♡

す……す……♡

ゴボ

セク

あつ

私の中に、そのまま出したんだ……

「じゃ、上に乗って」



「あつ、あんつ、んぐり……  
はつ、んつ、い……やあ……つ、  
ああ……ハアア……ああつ、  
はあつ……あああつ……」

このままだとまた、  
中に射●されちゃうのだ……

「ああつ……いや……あ……  
あはああ……んつ……ぐん  
はあつ……あつ、ううつ、  
ん……ああつ、んつ、んんつ……」

はあ

ぐん

はあ

ぐん

ぐん

ぐん

なげまわります。

もつともつと  
朝まで新聞さんと  
繋がってるんだ……

「あつ、あああつ……  
あ、あ、いや……あつ……精●つ、  
中で、ぐちゅぐちゅ、いってるっ……  
んっんっ、あつ、はんっ、ああつ、  
ああん、やっああつ、  
んん……あああつ……ああ……！」

「中に出されたことはあるの？」

はぁ  
はぁ  
はぁ  
はぁ

「はああつ……んんっ……  
ああああつ……い、一回だけっ、  
あああつ、ああつ、  
ああつ……ああああんっ……」

「じゃ、俺は2回出すね」

「だめ、あ、あ、つ……だめ、  
だめっ……だめえっ……あ、あ、  
だめ、抜いてっ……えっ……！」

……でも、すごく気持ちいいの。  
本当はやめたくはないの。

朝まで新開さんとドロードロな  
セックスをしたらの……

「あああつ……はあつ、  
いくつ……あああつ……  
いくつ……いつちやうう……  
あつ、ああつ、あああつ……  
ああつ……イクつ……」

ドロードロ  
ドロードロ



はあ

はあ

ドロードロ  
ドロードロ

「あああああああああつ……  
あああああああああつ……」

やっぱり違う。

「あんなっ、あつ、あつ、あつ、  
そこっ、だめっ、んっ、ほきっ、  
そこっ、だめっ、ひらっ、  
あつ、あつ、だ、だめ……」

もう、カラダは  
新開さんのセックスじゃないと  
満足できないみたい……

「腰、すっく動らしてよ。  
今日はすっくらね」

んっ

んっ  
んっ

んっ

んっ  
はあ

はあ

んっ

「だつて、だつて……  
とまんないんだもんっ……  
ああつ……新開さんのおXXXX  
き、気持ちよすぎっ……  
あああ……ああっ……ああっ、  
そんなっ……ああっ……」

「SSS461N06666」



「俺の事も名前でも呼んでよ」

「あ、あ、あ、あつ、さ、悟つ……！  
あ、あ、あ、あはあ……！  
すぎ、悟のえつち、一番すぎ……  
…好き……あああ……  
大好き……！」

「そんなに気持ちいいの……  
旦那は家で待っているのよ」

セックス

まよ……♡  
まよ……♡  
まよ……♡

セックス

セックス

セックス

「だ、だつて……  
す、す……  
気持ちいいもん……！  
あはあつ、あああつ……！」

「奥つ、当たる……！  
ああつ、当たる、  
当たるよおつ……！  
あつ……ああつ……  
んああん……！」

「気持ちいい……♡♡♡♡♡  
凄いい、あぁ……凄いの、  
ほんとに凄いの……  
あぁあぁっ！」

チキチキ

「あんっ……あっあっあぁっ！  
悟っ、きて、「一緒に、あぁあぁっ、  
ハアアッ、あ、あぁあぁ……  
いや、いや、いやぁっ！」

「……♡♡♡♡♡  
♡♡♡♡♡♡♡♡  
真由美」

チキチキ

チキチキ

チキチキ

チキチキ

「あ、あぁっ、だ、だめ、  
だめ、だめだめ、だめっ……  
イク、いく、いく、いく……  
いくのっ……いくのおおっ、  
いくのおおおっ……っ！」

「……あぁっ、  
もうイクぞうだ……真由美  
♡♡♡♡♡♡♡♡」



「中っ、中で  
らからっ……」

「いいんだな、  
本当っ？」

私はうんうんと頷いて  
腰を思い切り振った。

「ああっ……イクっ……  
中に出すぞ、真由美っ……！」

「あっ……来てえっ……  
ふあっ、ふああっ……  
あっ、んんっ！  
くうっ、  
あああああああっ……！」



そのあとも私は  
新開さんに抱かれ続け……

結局その日……私は  
一度の避妊もすることなく

新開さんが吐き出す精●を、  
一滴残らず子宮で  
受け止め続けたのだった……

IP  
IP  
IP

Harles  
Harles

「結構本気だったけど、  
気づいてた？」

「気づいてました。  
あれだけセックスすればさすがに」

「悪い女」

「悪い男」

「じゃ、元気で」

「はい、新開さんもお元気で」

「あ、あ、あつあつはあつ、んくつ、くふうつ、あつ、うんん……ああつん……」  
真由美が退職してから。

俺たちの本格的な子作り生活がスタートした。

「あつ、あつ、あつ……ああつ……  
靖くん……んっ……気持ちいいよっ……  
あああつんんっ……っ……んっ、へっっ……」

かつて新開さんを抱かせてくれたのが、  
もう随分と昔のことのように感じる。

んんん  
んんん  
んんん

実際にはまだ、数か月しか経っていないのに。





「ああっ、ああうっ、  
はあ、はあ……今日も、  
いっぱい出してねっ……♪  
あっ、はあああっ……  
ああっ……あ、ハア……  
あああっ……  
んああっ、んっ……」

「ああ……今日も  
沢山出すからな」

「ああっ、はああっ、  
ああああっ……あ、あ、はあ……」

週に2〜3回で  
やっていたセックスは、  
今はもう、ほとんど  
毎日になっていた。

「あ……ああ……  
んああん……はあっ、  
あっ、んっ、んっ……  
んっ……」

アッ  
アッ



「ああっ……ああっ……ああっ……  
あああっ……ふあっ……はあっ、  
はあっ、あ、らっ、あっ……  
あああっ、らっ、らっ……」

……真由美を  
抱きたくて抱きたくて  
たまらないという。  
そんな俺の欲求に  
真由美が応えてくれて  
いるからでもあった。

セックス

はあ

はあ

はあ

セックス

「はああああっ……  
あふうっ……あ、  
ああっ……イイツ、  
んっ、ああああんっ……」

それはもちろん、  
早く子供が欲しいという  
理由もあったのだが……

はあ



「っっ……はあっ……はあっ……」

「もっど……もっど……  
あぁっ……もっど……  
靖くんっ……あぁっ……」

「……っ……っ……」

「ああああん、私もっ……  
きちゃうっ……あぁっ、  
気持ちいいよっ……！  
靖くんっ……靖くんっ……」

射●に向けて、思いきり腰を動かす。

あぁっ、  
あぁっ、



「あつ、あつ、ああああつっ！  
あつっ……ああ……あつ、あつ、あつ！  
あつ、あつ、あつ……ああ……」

はあ

はあ

はあ

はあ

「真由美……  
愛してる……」

「靖くん……  
好き……すぎ……  
あ、あああ、あああ……  
愛してる……  
愛してる……」

ド

ド

ド



「んはあっ！ はあっ！  
はあっ……はあっ……」

「はあ……はあっ……！  
はあっ！ はあっ……はあ……  
はあ……はああああ……」

はあ〜……♡

はあ〜……♡

「ふふっ……まだお腹の中熱い」

ゴボ

ドロオ

びん

「……まだ入ってる感じる？」

「靖くんが、中にたくさん  
入ってるんだなーっ……」



「……おひさし」

「幸せ……」

「そろそろ俺たちはどちらからともなく顔を寄せ合い……」

は……♡

「……おひさし」

「幸せなキスを交わした。」

「愛してるよ、靖くん……」

真由美の体を抱き寄せる。

そして……  
この幸せをかみしめる。

ウソ

出来る事なら  
ずっとずっと……

こうして、愛し愛される関係を  
続けていきたいと、俺は願うのだった。

———  
終わり。



大人の禁SEXY絵本

©アトリエさくら